

猫
ヶ
川
村
の
渡
し
賃

SAMPLE



机上にネコ

本書の内容は、すべてフィクションであり、実在する人物、宗教、団体、地名、事件などは一切関係ありません。

また、この本は特定の宗教、思想、心情などを援護または非難する目的をもって書かれたものではありません。

本書内において、一部に特定の宗教を連想させるモチーフや不快さを感じさせるような表現を用いている場合がありますが、題材とするテーブルトーク TRPG ならびにクトゥルフ神話において親和性のある時代的、文化的な背景を表現することを目的としています。差別などを援助するためのものではありません。

◆シナリオデータ

舞台 : 現代日本

プレイ人数 : 1名 (人間探索者1名、猫探索者1名)

プレイ時間 : 3～5時間

◆はじめに

本シナリオは、現代日本の山にあり地『猫ヶ川』(ここが「わむら」)が舞台となる。友人の「猫先 マオ」が「猫ヶ川」に「バースト神」(バースト神)の「信」の「惑」に乗せられ、人間・猫それぞれのルールに沿って行動するシナリオになる。

人間探索者では、【クローズドで、理不尽なクトゥルフ】を体験できるように構成している。

逆に、猫探索者では【猫から見た情報を集め、猫ならではの技能を使用するクトゥルフ】になるように努めている。

エンディングに向かうにつれて、PL 1人が PC 2人 (人間・猫) を扱う場面なども出てくるため、情報整理の時間を挟むことをお勧めしたい。

◆シナリオ背景

死にたくなかった少女と、少女の代わりになろうとした猫が「猫の神様」を怒らせてしまったお話し。

「神様とは？」

舞台となる『猫ヶ川村』は、二つの神が土地を守っていた。

一つ目は、土着信仰である『7体のお地蔵様』を祀(まつ)る猫ヶ川寺。高名な僧が、死後に六道輪廻を巡った末に、猫ヶ川村を見守る観音様へとなった人間側の神様である。

土地の形成から育まれた神であり、六つの世界(六道)を巡ったためにとても大らか。近代になり猫側の神である『バースト神』がやってきた際も、人間側のルールと重ならない事を条件に受け入れた。

二つ目は、時代の流れにより異国から流れてきた猫の女神『バースト神』である。大正時代、周辺地域が食糧難に苛まれていた時に、有力な名家の避暑地であり、保護のあった猫ヶ川村に人間だけでなく、猫を含めた周辺の動物が集まってきた。環境の変化に怯えた猫たちが『なにごとにも暮らしたい』と、バースト神を信仰する猫一族を中心に願った(儀式を行った)為、呼び出されたバースト神『猫ヶ川村の猫を守護する神様』より、猫側のルールが作られた。

「人間・猫のルールとは」

人間は亡くなると、「六文銭」を持って三途の川を渡り、六道を巡ってまた人へと転生する。

猫側は亡くなると、「月への跳躍」でバースト神の元に戻っていき、再び猫の世界で生きていく。

→このルールの元、両方の神様は上手く共存していたが守護する対象である人間と猫が亀裂を生んだ。

「このルールでは」

猫ヶ川村で暮らしている(存在する)人間が亡くなった場合、六道を巡るまでは人間のままである。

猫ヶ川村で暮らしている(存在する)猫が亡くなった場合、『九つの生』がすべて消えるまで、猫のままである。

「物語の発端」

時代は明治、名家であった『東外神（とうがいじ）家』は度重なる国政の乱れで衰退していた。代々、積み上げてきた資産は底を尽き始め、不運が重なるように流行病で跡継ぎの子供たちが亡くなっていった。唯一、病弱な少女が1人残ったが、最終的には流行病で体を壊し、療養のために別荘（猫ヶ川村）へ住まいを移すこととなった。病もあり一人ぼっちだった少女は、猫ヶ川村でバースト神と親交の深い猫一族の末裔『ロク』という猫と友になる。

しかし、6歳の誕生日に少女はこの世を立つ。死ぬ間際、唯一の友人であったロクに「私も、物語で聞いた猫みたいに沢山の命があったら良かったのに」と言い残して。その言葉に、残されたロクはバースト神にお願いに行く。「自分を人間にしてください、そして残した命を少女に与えてください。ロクは猫である誇りを捨ててほしいのだ。」

人間と猫のルールを破るその願いに、バースト神は怒りの詠言『少女を猫に変え、現世（探索者たちの世界）に繋いだ』。逆に、猫であったロクを『死ぬ直前の少女の代わりに、死亡』させる事でお互い二度と、会えないようにした。

その結果、ロクの願いどおりに少女は現世に猫の体だが『生きて』繋ぎとめられた。しかし、元が人間のために猫のルールで死ぬことも出来ずにいた。猫になった後は自分の生家が衰退していくのを見た後、せめて猫ヶ川村が平穏であるよう努めてきた。人間だった頃に猫の友がいた事を覚えており、自分が原因で友が亡くなったと考えている。

一方、少女の代わりに死亡したロクは、残り『8個の魂を持つ』猫としての存在をバースト神から否定され、しかし「六文銭」を持っていない・用意してくれる者もないため人間のルールで死ぬことも出来ずにいた。哀れに思ったお地蔵様が『ここで、いつかやってくる少女を待てばいいと』言われたため河原で待っていた。長い間、待っていた影響で、自分が猫だったのか、それとも（少女が生きなかった）人間なのか曖昧になっている。

そんな、両方のルールから外れた2人を正してほしいと、人間側の神様と怒りの静まったバースト様の考えが、満月に影響されて探索者たちを巻き込んだ。

◆PCへの事前情報

→このシナリオは、ストーリーに沿って進んでいく一本道寄りの形式になっています。

今回は『人間探索者』と『猫探索者』を、1人と1匹作成してもらいます。

猫ヶ川村という避暑地が舞台で、小説家の友人が『小説のネタになりそうな噂があるのだけれど、（探索者の）猫について来てほしいんだよな〜』と誘ってきます。

温泉ぐらいしか観光地のない場所で、一泊二日のプチ・バカンスを楽しむ（予定）のシナリオです。

「人間探索者」

推奨技能→聞き耳・目星・説得・作成（料理） ※戦闘技能は不要です。

「猫探索者」

推奨技能→ヨウル・人語

※シナリオの都合上、人間探索者の飼い猫（それなりに缶切りを気に入っている）設定が好ましい。